宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第11号（2004）31－46頁

宮崎県における児童生活詩の展開（二）

――昭和戦前期の綴方教師――

菅　邦男

昭和十年版『年刊　日本児童詩集』には、宮崎県から七校、昭和十一年版『年刊　日本児童詩集』には二校の子どもの詩が収録されている。このうち、美々地小学校・平岩小学校・上野小学校・鞍岡小学校・押方小学校については、前号（宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学第十号）において既に述べた。ここでは残りの北郷小学校、第六宮崎小学校、第七宮崎小学校について見ておくことにする。

なお、土々呂小学校については、別途「木村寿論」で扱うことにする。

一、北郷小学校の子どもの詩

1、今村十三郎の指導

①二篇の詩

昭和十年版『年刊　日本児童詩集』には、東臼杵郡北郷小学校の詩二篇が掲載されている。いずれも尋常一年生の作品である。

十二月

オ月サマ　　田村アカ子（ママ）
宮崎県東臼杵郡北郷小学校
今村十三郎指導〈カガヤキ〉

ケサノオ月サマ
マルイ　カツタヨ
オ月サマ
アサノウチニデルト
サムイ　カロ。

「田村アカ子」は「田村アヤ子」の間違いである。

「マルイ」月とあるから、これは満月だろうか。とすれば明け方、西の空に残った月であろう。いつも夜に出る月が、朝出ている。こんなに朝はやく出ると寒いよと、一年生は思ったのである。夜は布団の中で暖かく寝ているので、そう思うのだろう。寒い朝に、白い月が寒々として見えたのである。子どもの思考のおもしろさである。

ヨチヤン　　矢部照子
宮崎県東臼杵郡北郷小学校
今村十三郎指導〈カガヤキ〉

ウチノ　ヨチヤン
カゼニオヅカツテ　ナキマス
ワタクシガ
カゼハ　フキヨラントイフト
ユビデ　木ノハヲサシマス

何とも可愛らしく、微笑ましい詩である。「カゼニオヅカツテ」は「風にこわがって」、「フキヨラントイフト」は「吹いていないと

言うと」の意味である。小さい妹（あるいは弟）は、幼いだけに、自然の動きに鋭敏なのだろう。風の動きを木の葉に見るところが素晴らしい。

②文集『カガヤキ』
～千葉春雄の賞賛～

文集名は『カガヤキ』である。今は失われている。

指導者の今村十三郎は、『宮崎県学事関係職員録』（以後、「職員録」）によると、昭和二年に土々呂小、三、四年は職員録が欠けているので不明だが、昭和五年には北郷小に在職している。昭和九年には方財小学校に転勤になっているので、昭和十年版『年刊　日本児童詩集』に掲載されているこれらの詩は、昭和八年度の文集から採ったものと思われる。

千葉春雄の「文集談義〈その十三〉」（教育国語）には、この『カガヤキ』第一・第二号が紹介されている。同誌に木村寿の文集「ひかり十四号」も紹介されているので、昭和八年のことである。「ひかり十四号」は失われているが、十三号が昭和八年七月、十五号が昭和八年十一月発行なので、文集『カガヤキ』も昭和八年度に発行されたことは間違いない。

「文集談義〈その十三〉」では、「編集は今村十三郎氏。文集の計画がとてもいゝ。第一号には五月二十日から七月十七日までに作つたものを集め、第二号には七月一日から九月二十九日までに作つたものを集めてある。尋一の綴り方のほんの出発から、文集に文の成長を記録しようといふのである。普通の文集より研究的資料としての効果を多くもつてゐる。」と評価されている。

尋常一年生の文集であるから、「第一号には五月二十日から七月十七日までに作つたものを集め」てあるということは、それまでには文字が書けたということである。あるいは文字が書ける子どもの作品だけで文集を作ったのか、口頭詩・口頭作文だったのか分からないが、いずれにしろかなり早い段階からの綴方指導である。年度初めの作品を第一号とし、七～九月に書いたものを第二号とすることで、一年生の文章がどのように発達したか分かる、それが「研究的資料としての効果を多くもつてゐる。」というのである。

千葉春雄は続けて「それに編集方法が、学年にぴつたりとしてゐる。今まで何千冊、或は何万冊といふ文集を見たが、尋一の文集を、これほど尋一らしく編集したのを見ない。愛情のこもつてゐることもすぐれてゐる。多分土々呂の木村君などゝ呼応してやつてゐるのではないかと思ふ。」と言っている。

千葉春雄は、編集構成が木村寿の文集「ひかり」の影響を受けていると見たのであろう。具体的にどのように「尋一らしく編集した」のかは、文集が失われているので分からない。木村寿は、一年生の一学期までにはクラスのほぼ全員が文字を書けるように指導している。今村も一年生の五月から綴方を書かせているので、早い段階で文字指導をしたはずである。これも、恐らく木村寿の影響である。

最後に千葉は宮崎県の文集に触れ、「宮崎は送つてくる文集は少いが、送られたものには、必ずすぐれた面目がある。素質のいゝ人が耕したところを見てゐるせいもあらうが、熱心で本気なことも、かういふいゝものを作る一つの原因であらう。『ひかり』といひ『カガヤキ』といひ、文字通り、名をはづかしめてゐない。」と賞賛している。そして「たゞ『カガヤキ』は、創業時代であるから、編集者にはどことなく実践的な自信が見えてゐない。これが号を重ね、歴史をもつたら、素晴らしい文集になると思ふ。」と励ましている。好意に満ちた評である。

③『綴り方倶楽部』への執筆
～方財小学校時代～

千葉春雄の知遇を得た今村十三郎は、『綴り方倶楽部』昭和十年六月号に、「文とたね」という文章を寄せている。子ども向けに書かれた「文と詩のお話」の中の一つである。

今村はそこで、「文材」を作物の種に喩え、良い作物を作るためには、まず立派な種が必要であることを説いている。綴り方も同じで、良い綴り方を書くためには良い種（良い文材）が必要で、それを得るためには生活の中で日常的に「心を働かせ」、書き留めておくことが大事だと述べている。

文とたね

今村十三郎先生

お百姓が、大根やなつぱをつくる時には、初めに種をまきますね。すると、其の種から芽が出て来ませう。それを、色々と手入れして育て上げるのですね。所が、大きくて、おいしい大根やなつぱをつくるのには、大事なことが二つあります。

その一つには、はじめに立派な種る見つけることです。種をまいても、その種が、古い種や虫の食つた種や、余り太らない種であつたりすれば、芽が出なかつたり、芽が出ても大きなものが出来なかつたりします。

二番目に大事なことは、「上手に育てるみちを知つてゐて、よく手入をしてやる。」ことです。いくら上等な種をまいても、それきりで、少しも手入れをしなければ、決して立派なものは出来ません。だから、お百姓は、種をまいた後で、水をかけたり、草をとつたり、こやしをやつたりしてゐます。

皆さんが、綴方で文を書くのも、お百姓が大根やなつぱなどをつくるのと、よく似てゐると思ひます。

綴方にも種がいりますね。綴方の種といふのは、「書くことがら」のことです。「文材」ともいひます。いくら上手な文が書きたくても書くことがらがなくては、何も書けません。綴方の時間に、先生が「何か面白いことがありますか。」とか、「今日は、家の人のことで書いてもらひませう。」などいはれた時、何も書くことが無くて困る人や、書いても、つまらないことを書くやうな人は、第一の立派な種を見つけることをしない人達だと思ひます。お百姓に立派な種物がいるやうに、皆さんの綴方にも、面白い種を見つけることが、大切であることを忘れてはなりません。

けれども、よい種だけで、きつと上手な文が出来るとはいへません。その種を文に作り上げるまでには、色々の工夫と、うで前がいることは申すまでもありません。これは、お百姓が、種から芽を出させて、それを育てるのと同じやうなことです。

それでは、「どうしたら、よい文の種が見つかるか。」といふことを一寸だけ書いておきませう。

皆さんは、みんな生きてゐるでせう。所が、油断すると、生きてゐて、死んでゐるやうな人になつてしまひます。毎日毎日、色々なものを、食べたり、勉強したり、遊んだり、おかせいをしたり、見たり、聞いたり、いぢつたり、してゐても、困つたことも、美しいと思ふことも、ないやうな人だつたら、その人は、生きてゐるのか死んでゐるのか分からない人ですね。こんな人には、綴方の種は見つかりません。

所が、ほんたうに生きてゐる人は、自分の目や、耳や、鼻や、口や、手や、足やをよく使つてゐます。自分のからだをよく使ふといふことは、自分の心をよくはたらかせるといふことです。自分の心をよくはたらかせる人だつたら、何を見ても、何を聞いても、何をしても、ぼんやりしてゐません。「あゝ、かあいさうだなあ。」などと、一心になつて、見たり聞いたりします。だから、その時のことが、頭の中にしつかりときざみこまれるのです。それで、その時のことをよくおぼえてゐます。忘れてゐても、直ぐに想ひ出せます。

だから、綴方の種になるやうなことがらが、毎日いくつかあるのです。

所が、ぼんやりして生きてゐる人は、見る時でも、聞く時でも、遊ぶ時でも、その後でも、考へて見ないのです。一心にならぬのです。それで、直ぐに忘れてしまふのです。

それで、よい文を書かうと思ふ人は、自分の毎日のくらし方に、かうだと心をよく働かせるやうに工夫し、その上、その日の変つた出来事を、日記帳か、文題帳に書きつけておくやうにすればいゝと思ひます。

（『綴り方倶楽部』昭和十年六月号）

子どもに向けて論理的に分かりやすく、「文材」の重要性と生活を見つめる目の大切さを述べている。方財小学校に転勤してからの執筆である。

木村寿は「県下綴方童詩教育人展望」（『宮崎県教育』）の中で、方財小学校に移った今村十三郎に対して、「北郷時代の一年文集『カガヤキ』は教国に於て実質的に日本的文集と、千葉氏の推奨おくあたはざるもの。（略）子供の生活にあくまでも透進し、子供の生活としての第二の『カガヤキ』時代を出現させてほしい。でなければ『カガヤキ』の手前、あの獅子奮迅の精進も一簣を欠くといふもの。」と、活動を促している。

しかし方財小学校での今村十三郎の綴方指導については、よく分かっていない。『綴り方倶楽部』に原稿を依頼されるくらいだから、「一簣を欠く」状態にはならなかったのだろうが、その後は不明である。

今村十三郎の指導作品は、先に挙げた昭和十年版『年刊　日本児童詩集』の二編しか見い出せなかったが、実際にはもっと多くの作品が『綴り方倶楽部』に掲載されたのであろう。事実、『綴方教育』（第九巻第八号）に掲載された『綴り方倶楽部』七月号の広告によると、昭和九年七月号には、「雲」という綴り方が掲載されている。北郷小尋常一年甲斐惇夫の作品である。しかし、雑誌が失われており、作品を見ることはできない。

なお、北郷小学校には当時、武藤季義編集の『北斗』という文集もあったようである。

2、前田彦太郎の指導
～入下（にゅうした）分校～

北郷小にはもう一人綴り方の指導者がいた。前田彦太郎である。「職員録」によると、昭和二年には既に北郷小に在職しており、昭和十五年まで北郷小に名前が見える（以後の「職員録」欠）。今村十三郎に比べるとずいぶん長い感じがするが、これは北郷小の分校を含めての在職期間である。

前田彦太郎は、入下分校で『小鳥』という文集を発行していた。昭和十一年版『年刊　日本児童文集』（全日本綴り方倶楽部編集　東苑書房）に、その文集から採った「おぢぞうさん」という綴り方が一篇掲載されている。尋常二年生の綴り方である。

やまいもほり・尋二作品集

三月

おぢぞうさん

田村ハツ子
宮崎県北郷尋校入下分校
前田彦太郎先生指導〈小鳥〉

この間おかあさんと（ママ）おぢぞうさんまゐりに行きました。かずちやんとこに行た時にはかずちやんどもはもう行てしもておりました。それで　私たちはいそぎました。けれども　おひつかんでした。

その日はふるの正月二十四日でした。村に行たおりにはまだ人がいきよりなさいました。そしてくみやいによつてみよちやんがたびをかりなさいました。その時　くみやいには高いバスがとまつてゐました。私は「あのバスにのりたいなあ。」と思ひました。そしておかあさんに「自動車にのつていこや」といつたらおかあさんの「のるといんま三十銭やらんならんぞ。」といひなさいましたからのりませんでした。

うなまにいきついたら人がたくさんゐました。私はそれを見て「あらあんげ人が集つとるが足にのぼられはせんどかい」と思ひました。私はおかあさんのたもとにとづいて人をせりわけせりわけしてあるきました。人が私の足にのぼつたりしていたいでした。にんぎやうくわしやあそびどうぐやゑ本やよきやなたやはさみや色々なものがありました。それからおぢぞうさんにまゐりました。上の方に上つて見るとおそろしいでした。おかあさんはかねをかん〳〵とたたいておがみなさいました。それから下へ下りました。おじるおりにはおもしろくて私はどん〳〵下りました。おじつて私はおぢぞうさんのおもちやをかつてもらひました。それから一寸ばうしのおるとこに行つて見ました。一寸ばうしは小さくてあたまが大きくてあたまは、はいからにしてせがひくくてこえてゐました。それでもみよちやんが泣くからいつときしか見てゐませんでした。それから外へ出た時にはぜには十銭か十五銭かでした。それからおかあさんとうなまのすえをばさんとこに行きました。そしてばんになつてくわつどう見にいきました。一ばんあとがよいでした。男の人と女の人がだんを下つて来よりました。そこには大きな木があつて　その前に人が一人か二人かしんでいました。その男の人はおそろしくてめんめ方ににげていにました。女の人は木になんかかつて下を見たらおずしてこしぬけがして逃げていきをした。そしたらあたまの毛の長いからだがまがつた男の人がとぐちをあけて女の人を出しました。そしたらその人が「何もおらんが」といつてさがしました。

そのばん私はすえをばさんとこにとまりました。さうして朝になりました。私とおかあさんはみせのにつきに行つていつときあそんでいにました。いぬる道でおかあさんはやくばによりなさいました。やくばから自動車にのつてかへりました。その日は私はけつせきしました。

（昭和十一年版『年刊　日本児童文集』）

北郷村の宇納間地蔵にお参りした時のことを書いた綴り方である。宇納間地蔵は小高い山の上にあり、長い階段を登って行く。それにしても、人に足を踏みつけられるなど、ずいぶん賑わっている。出店が並び、今日からすると差別的な見せ物小屋の様子なども描かれている。一日学校を休んで夜には活動（映画）に行くなど、当時の親や学校はお祭りには寛容だったようである。

なお、指導者名の後ろの〈小鳥〉は、前述したように文集名である。「やまいもほり・尋二作品集」というタイトルは、同誌に掲載されている西臼杵郡押方小学校の綴り方「ヤマイモホリ」（甲斐直政・佐藤実指導）から採ったものである。

二、第六宮崎小学校の子どもの詩

～椎葉重人・都市部教師の苦悩～

昭和十年版『年刊　日本児童詩集』には、第六宮崎小学校の作品として「朝」一篇が掲載されている。第六宮崎小学校は、現在の宮崎市立江平小学校である。

指導者の椎葉重人は、昭和三年に宮崎師範本科第一部を卒業し、昭和七年から十一年まで第六宮崎小学校に在職している。『年刊日本児童詩集』には文集名は記載されていないが、昭和九年頃に詩集『かがやき』を出しており、この中から採られた詩であろう。尋

常五年生の作品である。

なお、第六小学校では学校文集『第六文苑』（上下両学年用の二部）も出ていた。これも椎葉重人の編集である。

二月

朝

黒木貞子
宮崎市第六宮崎小学校
椎葉重人指導

宮崎神宮の森に
白い朝霧が
しいんとしてゐる
校長先生の声が
一声一声はつきりひびく

『綴り方倶楽部』昭和九年十月号から再録された作品である。作者名の後に「尋五」とあるだけで、作品に異動はない。『綴り方倶楽部』での「評」は次の通りである。

「神宮の森をながめ、校長先生の朝の訓話をきいてゐる気持。その気持がしらず〳〵詩のかたちの上にも出てゐます。どんな詩をかくときでも、かういふ気持で書くと、きつとはじめていゝものがかけるでせう。」

宮崎神宮の森に朝霧がかかり、森閑とした雰囲気が伝わってくる。学校では朝礼が始まり、校長先生の声が一声一声はっきり響いてくるほど、生徒たちは緊張した面持ちで静かにお話を聞いている。朝霧に包まれた神宮の森の静けさと朝礼の静かさとが重ね合わされているのである。

現在の江平小学校と宮崎神宮の間には家が建て込んでおり、神宮の森を眺めながら訓話を聞くなど想像もつかないが、戦前は家がまばらで、神宮の森が「しいんとしてゐる」と感じられるような距離感だったのだろうか。

あるいは、何か学校の行事で朝早く宮崎神宮に来たのかもしれない。朝霧に包まれた中で、生徒を前にお話をする校長先生の声が、一声一声はっきり響きわたる。宮崎神宮の森閑とした様子を描いたものとも取れる。

この「朝」と同じ頃に書かれたと思われる作品に、詩「朝霧」（椎葉重人指導）がある。昭和九年の『宮崎県教育』に、「誌上合評児童作品」として掲載されたものである。「誌上合評」とは、一人の教師が自分の指導した作品を一篇推薦し、それについて複数の教師が誌上で批評するというものである。

朝霧

第六宮崎小学校生徒
尋五　伊東和子

霧、
まつ白なきり、
松林の右に
しはん学校が
宮殿のやうに浮いてゐる。

（九、二五）

この詩には、指導者椎葉重人の「推薦後記」があり、その後に十一人の評が付いている。県外から磯長武雄、近藤益雄の二人が「評」に参加している。他は県内の教師である。

磯長は鹿児島県、近藤は長崎県の著名な綴方教師である。磯長武

雄、近藤益雄、木村壽の順に、三人だけが太字で名前が記されており、別格として扱われている。

椎葉重人は「推薦後記」の中で、児童自由詩を「児童でなければなし得ぬ観方、表現をなす児童独特のものである。」と、一般の詩とは違う独自性を持つものとして位置づけている。児童自由詩は、いわゆる「芸術的な偶発的な表現に随喜するもの」であってはならず、「必然的な錬成的生産」でなければならない。その必然的な錬成過程、「即ち作品化の過程的労作表現錬成といふ所」にこそ児童自由詩の教育性はあるとするのである。したがって児童自由詩を児童の「自然発生的な無意識的言語活動として彼らの生活を本位とし平凡さの持つ健康な現実的な全身的なものとして指導しよう企図してゐる。」という。

生硬な表現だが、要するに、児童詩は偶発的に生じるような芸術美を目指すものであってはならず、子どもの生活に根ざした自然発生的な健康なものでなくてはならないとするのである。そしてその作品創作過程にこそ教育性はあるというのである。

しかし、詩「朝」や「朝霧」が、椎葉の言う「子どもの生活に根ざし、自然発生的に」生まれてきた作品と言えるだろうか。

この点について椎葉重人は「童詩はこんな『朝霧』のやうな作品ばかりであってはならぬ。もっと明朗な積極的な生活詩とか行動詩とか言はれるものがあらねばならぬ。」と言っている。

では何故「朝霧」を合評の対象に選んだのか。

「特に此の朝霧を選んだのは、南国日向の深い霧と、それが自然に育んでゐる一つの墨絵的な感情即ち郷土観と言つたやうなものが表れて民族的な素朴的な、祖国感情とでも言はれさうなものがひそんだりにじんだりしてゐると思つたからである。」

生活詩や生活行動詩も視野に入れているが、敢えて「朝霧」を選んだのは、祖国感情とでもいったものが潜んでいると思ったからだと言うのである。

しかしこの説明では、生活詩や生活行動詩ではなく、なぜここで「民族的な素朴的な、祖国感情」が表れている詩を選ばなければならないのか、よく分からない。

第一、「朝霧」に椎葉重人が言うような民族的な祖国感情があると断定するのは無理である。書かれているのは霧の中に師範学校が宮殿のように浮かんでいるという風景的事実のみであり、そこに作者の「民族的な祖国感情」があるとするか否かは、読者次第である。「民族的な祖国感情」を感じているのは、この詩を読んだ読者としての椎葉重人自身である。「宮殿」も誰もが日本の宮殿を思い浮かべるわけではない。師範学校の建物を日本建築と取るか、西洋建築と取るかによっても違ってくる。霧によって宮殿化された師範学校の建物、つまり洋式化されたイメージで受け取ることも可能である。評者の一人である磯長武雄は、「宮殿は南洋の宮殿でしょう」と言っている。なぜ南洋の宮殿なのかよく分からないが、人によってイメージが多様であることを示している。「宮殿」ではなく「神殿のように浮いてゐる」であれば神社の建物をイメージし、祖国感情が潜んでいるということになるのかも知れない。しかし「神殿」でも、ギリシャの神殿を思い浮かべる人もいるだろう。

この後椎葉は、童詩教育は混沌としているとし、「童詩の客観的具体的標準と言ふやうなものは何所にあるのか、これこそ私達実践家の求めてゐる座標である。此の具体的な作品を契機として、お互ひ論じ切磋し、童詩教育が当然持たねばならぬ座標と公道を求める為に、その材料として此の貧しい実践の一滴を提供し」たと述べている。

椎葉重人は児童詩の「座標」が欲しかったのである。児童詩とはどういうものか、その具体的な形が知りたかったのである。

椎葉は、『宮崎県教育』昭和十一年三月号の「実践綴方教育誌上

研究会」第二部に、「街の子の綴方」という文章を書いている。「街の子」の綴方がふるわない原因についての考察である。椎葉は四つの原因を挙げている。

第一に、指導者が「農村の活発な実践に圧倒されて、指導の方向性を喪失した」こと。

第二に、街の子は非生活者であること。

第三に、表現が観念的であること。

第四に、綴方を指導する教師に農村出身者が多く、「都市の動きに鈍感」であること。

自分自身、椎葉村の出身者である椎葉重人は、都市部独自の児童詩・綴方の方向性を探ろうとして、つかみかねていたのである。農村の子は生活自体が「生活的建設的な生活体験」であるが、街の子にはそれがなく「所謂土の香りの高い作品」が望めない。ならば「都市の香りの高い作品」がその対局として考えられるべきだが、それが農村出身教師には出来ない。であれば、都市部における「農村」を目指すしかない。

「街の子」独自の児童詩を目指す椎葉重人は、「朝」や「朝霧」にその方向性を求めたのである。都市部にある「自然」である。それであれば農村出身の教師にも身近なものであり、都市部の子どもが「非生活者」であっても「朝霧」（自然）は子どもの生活の中で見た現象であることに変わりはない。更に霧の中に浮かぶ「宮殿」に「民族的な素朴的な、祖国感情」を見出すことによって、農村児童詩の持つ「土の香り」に匹敵する郷土感を出そうとしたのである。作品「朝」も、「宮崎神宮の森」にかかる朝霧を素材としている。それが農村出身教師としての椎葉重人の考え得る「街の子」の児童詩であった。「農村の活発な実践」を意識してのことである。

しかし「都市部」を強調するのであれば、「宮殿」や「宮崎神宮」に「民族的な素朴的な、祖国感情」を見るのではなく、逆に農村部には無い都会的な存在として師範学校や宮崎神宮を印象づけるべきだったのである。師範学校が西洋の宮殿のように霧の中に浮かぶ、それが街の子の生活に根ざしたものかどうかは別として、その方が都市的ではあった。

いずれにせよ、「街の子」の、真に街の生活に根ざした児童詩や綴方がどういうものか、椎葉にはつかみきれないままだったのである。椎葉はそこを論じて欲しくて「朝霧」を出したのであろう。

木村寿は「朝霧」を、「風景詩としてひとつのまとまりは感ぜられる」ものの、そのまとまりは「ハッと思つた時にスケッチした事より一歩先に進んでゐない気がする。それは対象物である霧の本態を深く観察しきれなかつた所にあると思ふ。」と評している。観察に深さがたりないというのである。

「民族的な素朴的な祖国感情」については、「此の詩はいくらよんでもさうした感情は浮びこないのである。子供の生活といふものをもつと見詰められてほしい」と手厳しく否定している。

「再びいふ。こんな風景詩の場合もつと対象につきこませてほしい。観察といふことも、対象を択み取るといふ態度を作つてほしい。」

そしてその選び取ったものを「ぶつきらぼうにつき出させるといい」と言う。ぶっきらぼうに出されたものは、「朝霧」に比べてまとまりはないかもしれないが、「生活感がある。霧からうけた子供の言葉が現はれるだらうと思ふ。」というのである。

その例として、木村壽が指導した子供の作品を二例あげている。

×

いつつも見てゐる赤水山
けさはきりの中から出て来る。

×

目の前をきりがはしつてゐる
山のきりは
川のやうに流れてゐる。

確かに見方、表現が新鮮である。いつもとは違った状況を的確にとらえ、表現している。いつも見ている赤水山が、今朝は「きりの中から出て来る」という捉え方は、見たままと言えば見たままだが、そのように見ること自体、出来ることではない。これが「きりの中に浮かんでいる」という捉え方であれば、傍観的であり、動きも深みも無く、平凡な表現になってしまう。霧の中から「出てくる」と捉えたところに、この詩のインパクトはある。木村の言う観察の対象を選び取るということである。

しかし椎葉重人にすれば、「赤水山」の無い都市部、「川のやうに流れ」ない霧が立つ都市部、その都市部にあって、農村の詩に匹敵するインパクトのある詩とはどういうものなのか、それが問題だったのである。

なお、綴方の方では、椎葉重人は、幾つかの「街の子」の綴方（文題）の例を紹介している。「或日の猫、私の性質、小松村、野球、代議士選挙、吉田松陰の像を見て、私の家の炊事場の衛生、サーカスの日本踊り、哀れなおばあさん、表具商、国史の勉強法、お母さんに叱られて」等である。クラスは「女児級」である。

「代議士選挙、国史の勉強法、吉田松陰の像を見て」などは確かに農村の綴り方では見かけない題である。「吉田松陰の像を見て」というのは、学校の廊下の壁に日本の偉人の像が掲げてあるのだが、入れ替えがあって、ちょうど教室の前に吉田松陰の像が掲げられた、その数日後に書かれた作品である。椎葉重人によると、この子はその像が掲げられるとすぐに綴り方に書くべく観察を始めたようである。吉田松陰の輪郭から描き、松下村塾のこと、児童文庫の本で読んだ「かくすれば」の歌のこと、明治維新のこと等を書き、「像を見る毎に、きりつと結んだ口もとから何か語られるやうだ」と述べている。

最後のところあたりが「表現がませて概念的」だということらしく、椎葉重人は「矢張り之も都市的なませ方はあるが、子供の現実生活から生れて来た作品であるから、之を拒否することは出来ないのである。」と言っている。

次に、「サーカスの日本踊り」を挙げてみる。

サーカスの日本踊り

六女　竹島律子

此の間私達は学校からサーカスを見に行つた。有田洋行の踊りはサーカス団の中でも名高いのだと聞いてゐたので行く時から、どんなにいゝのだらうかといろ〳〵想像してゐた。

サーカスのある所の前まで行くと、一ぱいの人が看板を見ていろ〳〵と話してゐた。中に入ると、今まで聞えてゐた音楽が、一段と高く響いて、私はもう胸がどき〳〵してゐた。舞台では「若人の血」と言ふ勇ましい感じのするダンスが始つてゐた。長くダンスを見なかつたので初めて見たやうに珍しかつた。次にも亦ダンスがあつたが、ぱつ〳〵と軽く踊るのと、同じやうな事を何べんも繰返すのが、終ひにはあまり興味がないやうになつた。

その芸の間々に、日本風の踊りが三つ四つあつたが、私が日本人をひいきしてではないが、何だか親しみを感じた。特に「元禄花見踊」といふのは昔の夢でも見るやうに感じた。それはダンスのやうに、ぱつ〳〵と軽々しくなくて、如何にも落ちついた静かな感じで、日本人が軽々しくない心持がよく表れてゐた。元禄時代に武士が強い気風を失つて、人々の心が弱々しく上品な世の中になつたあの頃、

あんなやうすをして、花見などして踊つてゐたであらうと思ふと、何だかあの時代の人々が思ひ出されてぽつとしてゐた。花見踊りなどいふのは、日本だけにあんなやさしい事があるのだと思ふ。日本は世界の公園といはれるだけあつて、自然を愛する心が昔からあつてあんな踊りにまで表していつたのであらう。西洋の踊りでは、あんな感じを表すことは出来まいなぞ考へてゐると、その踊りが奥ゆかしく感ぜられた。然し、ちよんまげをゆつて若様風をしてゐる者、着物をはし折つて身軽さうな男、高い日本髪をゆつた女の人などが入り乱れて踊つてゐるが、男の着物までが、かどの立たぬすらつとした模様であり、袖なども長いのである。あんな事ばかりしてゐて、武芸などの事や、働くことなど考へてゐなかつたやうに思つて、腹が立つこともあつた。けれ共、西洋風のダンスなどに比べると、けばく〳〵しくなく、靴のかゞとの高いのなどはかず、あつさりした質素な藁草履などをはいて踊つてゐるのを見ると、矢張り日本らしさを失はずにゐたことも思つた。音楽も実にのどかで、楽器は勿論笛や三味線や太鼓などの日本の楽器で、そんな楽器が、すみきつた音や静かな音や、高い音低い音を出して、入りまじつて、益々踊りがその気持ちを表した。背景は緑に紅のまじつたのであつたが、紅は桜の満開を表し、緑はその葉を表して、昔のその花見のやうすをよく表してゐた。

（中略）

私は帰りながら、西洋人はあんな日本踊りを見てどんなに感ずるだらう。日本のは面白くないと思ひはせんだらうか、など思つた。又私が日本人だから、日本のばかりをあんなによいやうに見るのかも知れんとも思つた。西洋人が見れば、西洋のは矢張り奥ゆかしく見えるのかも知れんとも思つた。そう思ふとどちらかわからんやうになつたが、矢張り私の心には日本のがよいといふのが強くのこつてゐる。

椎葉重人は作者について、「これは農家の子供であるが、私の級の級長でとてもいゝ作品を見せ、観察の鋭さには何時も感心させられる子である。」と言っている。

農家の子とは言ってもやはり「街の子」である。知的で、批評精神に富んでいる。評論風である。日本と西洋を比較し、日本踊りを西洋人はどう見るだろうかと気にしながら、やはり自分は日本のが良いと結んでいるところなどは、当時の世相を反映しているのだろう。世の中の思想的傾向をこのように具体的な形で反映できるのも、やはり「街の子」である。椎葉は、綴方においてはこういう方向を「街の子」の綴方として選んだのである。

三、宮崎市第七宮崎小学校の子どもの詩
〜阿萬祥吉・写生詩の指導〜

1、詩三篇

昭和十一年版『年刊　日本児童詩集』（全日本綴方倶楽部編）には、西臼杵郡押方小学校のほかに宮崎第七小学校の子どもの詩が三篇掲載されている。「枯草」（新保貞二）「魚とり」（日高正）「鉄砲うち」（仁田脇定志）である。

＊「昼の海岸　尋六」

（四　月）

枯　草　　新保　貞二

宮崎市第七宮崎小学校
〈河葛祥吉先生指導〉

枯草にすはつて
海を見下してゐた

地面から
青葉が芽を出した
口びるが
ぱん〳〵かはいてきた
めく〳〵とした地面に
手をあてて見た

（五　月）

魚　と　り　　日高　正

宮崎市第七宮崎小学校
〈河葛祥吉先生指導〉

父と舟をこいで
川口に出た
波がよせて来る
岸のあしが
風にうごく
投網を父がかまへて
「もう少しおせ」と
おつしやつた
何度もなげたが
一向かゝらぬ
青空には
とびが二羽
わをまいてとんでゐる
「これぢやつまらん」
と言つて
煙草をすひはじめられた
父のそばによつたら
生ぐさいにほひがした。

（十一月）

鉄砲うち　　仁田脇　定志

宮崎市第七宮崎小学校
〈河葛祥吉先生指導〉

林の中で
寒い風の吹く中を
ひよどりが鳴いてゐる
父がねらひを定めて
ずどんとうつた
おちたひよどり
血がぬめ〳〵してあたたかい
ちのにほひがする

このうち「魚とり」（日高正）「鉄砲うち」（仁田脇定志）は第七宮崎小学校の子どもの作品であることははっきりしているが、「枯草」（新保貞二）はよく分からない。檍小学校の卒業者名簿を見ると、日高正、仁田脇定志の名前はあるが、新保貞二の名前はない。当時の同級生も、「新保貞二」という名前は聞いたことがないという。

この三篇は『日本の子どもの詩　宮崎』（日本作文の会編）にも掲載されているが、「枯草」も第七宮崎小学校の作品としてあげられている。そこには、「めくめくとした地面に」の「めくめく」に

「あたたかい」という注が付けられている。「めくめく」は宮崎方言だという認識があったものと思われる。しかし宮崎市には「めくめく」という方言はない。少なくとも暖かいという意味で「めくめく」という言葉を使うことはない。地元（校区）の人に聞いても「めくめく」という言葉は聞いたことがないという。

『日本国語大辞典』（小学館）を引いてみると、「めくめく」の項目があり、次のように解説されている。

めくーめく【副】方言①目を開閉するさま。ぱちぱち。「目をめくめくした」青森県南部地方　②すすり泣くさま。「めくめくと泣く」山形県米沢　③物を食うさま。長野県下水内郡

『日本の子どもの詩　宮崎』が、どういう根拠で、「めくめく」を「あたたかい」の意味だと判断したのかは分からない。「ぬくぬく」の誤植の可能性もある。そう判断したのかも知れない。

あるいは「めく〳〵とした地面に」ではなく、「めく〳〵とした／地面に」だったのかも知れない。当時は誤植が多く、有り得ないことではない。

枯草にすはつて
海を見下してゐた
地面から
青葉が芽を出した
口びるが
ぱん〳〵かはいてきた
めく〳〵とした
地面に
手をあてて見た

「めくめくとした地面」がどういう意味なのかよく分からないが、いずれにしろ宮崎方言でないことは明らかである。

「新保貞二」は、他県出身の子どもなのではないか。卒業生名簿にも名前がなく、同級生もその名に覚えがないということになれば、六年生で途中転入し、短期間で転出して行った子どもなのであろう。

2、写生を根本に置く児童詩観

指導者は宮崎市第七宮崎小学校「河葛祥吉」とあるが、第七宮崎尋常小学校の職員名簿に「河葛祥吉」という名前はない。「阿萬祥吉」の間違いである。

第七宮崎小学校は宮崎市吉村町にあり、「児童数　男　三五九　女　三五三、学級数　一二」の学校である。現在の宮崎市立檍小学校である。

阿萬祥吉は、昭和三年に宮崎師範学校本科第二部を卒業している。第七宮崎小学校では、詩文集「あはき」を発行している。これは無論『古事記』に出てくる当地の地名「阿波岐原」からとったものである。

脚本等も書いていたらしく、「宮崎県教育」（昭和十一年七月号）には、戯曲「宮崎籠城」（六幕）が掲載されている。慶長五年頃の宮崎城を舞台にした話である。編者の言葉として「作者阿萬祥吉氏は、本年三月迄第七宮崎小学校に教鞭をとり、退職して目下台湾中州彰化市第一公学校へ奉職中である」とある。第七宮崎小に勤務したのは、昭和十年度までである。

阿萬祥吉が第七小学校を退職する直前の昭和十一年一月、『宮崎県教育』新年号の「推薦児童作品の鑑賞と指導」という欄に「父」という詩が掲載された。作者は「魚とり」を書いた日高正である。

この欄は、教師が自分の指導した作品の中から一篇を選び、それを他の綴り方実践家が批評するというものである。指導した教師の

考え方も述べられており、阿萬祥吉の児童詩観の一端が伺える。

父

第七宮崎小学校六年　　日高　正

漁から雨にぬれて
帰つて来た父
何とも言はずに
風呂の火に立ちはだかつた。
生ぐさい魚のにほひ、
たき火にはゆる赤黒い顔、
着物からは湯気が立つ。
「さみこたねえな」
と言つたら、
「うん」と言つて、
鼻をすする父。
私は松毬を
一すくひくべた。
時雨の夕方
波の音が高い。
だまつて父の顔を見た。
父もだまつて私を見た。

阿萬祥吉は「推薦後記」の中で、この子たちには四月に受け持ってから初めて詩の指導をしたこと、失敗ばかりしてきたが「近頃幾分か私の意図してゐる詩が生れ出さうな気が」し始めていることを述べている。この詩「父」や『日本児童詩集』掲載の三篇は、阿萬祥吉の「私の意図している詩」に近いものだったのである。

では、阿萬祥吉の「意図している詩」とは、どのようなものだったのか。

阿萬祥吉は、詩の「根本を写生に置きたい」と言う。

「私は詩の根本を写生に置き、実相に観入して自然自己一元の生を写すことだと思つてゐます。（略）作者の主観は封じ去られるやうですが、写生によつて表現された姿は、客観に寄る主観であり、人情に累はされない本来の我に近いものだと思ひます。」

阿萬は、前述した椎葉重人の指導作品「朝霧」の評者（「誌上合評　児童作品」）の一人でもあったが、「朝霧」には物足りなさが残るとし、「自然把握の態度が平面的で対象に働きかけて行く作者の主観的な生活行動を如実に見ることが出来ず、作者の生活的個性色が希薄で、類型的なものになつてゐる」と指摘している。その上で、自分の写生観を述べている。

「写生するとは、私達の内部にある一枚の鏡に写された自然の形象を如実に再現することではなく、幾つもの面を持つてゐる道具、即ち感官を通して写すのである。而もこの感官は、生活的行動、生活的実践に依つてこそ、初めて対象の具体的なすがたを把握することが出来るのであると思ふ。」

ここで言う「生活的行動」にともなう「感覚を通した写生」が、「父のそばによつたら／生ぐさいにほひがした」（「魚とり」）であり、「血がぬめ〳〵してあたたかい／ちのにほひがする」（「鉄砲うち」）なのである。

これが、

林の中で
寒い風の吹く中を
ひよどりが鳴いてゐる
父がねらひを定めて
ずどんとうつた
おちたひよどり

で終わっていたのでは、単なる写生である。「血がぬめ〳〵してあたたかい」と見るところに「主観」がある。

「魚とり」「鉄砲うち」は、いずれも生き物との接点を描いている。「魚とり」は生臭さに、「鉄砲うち」は血の臭いに、生と死を感じさせる。また「枯草」も植物の死と生を描いている。こうした描き方・見方に、阿萬祥吉の児童詩観が反映しているのである。

しかし最初からこうだったわけではなく、入江道夫の「児童自由詩とリアリズムの実践」（『綴り方倶楽部』昭和九年五月）には、阿萬祥吉の指導作品が取り上げられ、批判されている。

3、入江道夫の評価

入江道夫は「現代は大いなる転換の時代」であり、児童詩も「社会意識的観点からの再出発を当然に要請せられる」のだと言う。個々の児童の生活にはその基盤に「分裂した社会の現実が横たわってゐる」のであるから、「児童が自己の現実に切実ならうとする限り、その社会の現実を反映して、批判的にならざるを得ない」と言うのである。

これに対して今までの児童自由詩の傾向は、「かかる生活苦、社会苦を担える現実の児童を歪曲して、あらゆる生々しい生産場面とのつながりに於て描くことを回避した線にある。そして、何かそこに超階級的な、普遍的な童心といふものがあるかの如き幻想の上に立つて、単なる刹那の驚異に立脚するところの感覚的事実を描くことに終始して来た。そして詩の題材は殆ど自然景象を写すことにのみ限られて来た。」と批判している。

この批判の具体的な例として挙げられたのが、「さかなの光」という詩であった。阿萬祥吉が瓜生野小学校で指導した作品である。

さかなの光　　宮崎　梅野（ママ）孝吉

川の上を
かはせみがすれ〳〵とんだ
くはへてゐる
さかなのうろこが
夕日に
きらきらかがやいた

「過去の集積せられてゐる児童自由詩について反省するがいい。表現態度に於いて、取材方法に於いて、その形式的技術すらも、殆ど二つの芋と芋との様に似通つたものであることを観ずるであらう。『魚の鱗が夕日に光つた』といふ単なる感覚的事実を捉へて居れば、其処に詩味があるとされて来た。そして児童たちの目をつけるところは、非常に限定され且つ定式化してしまつた観がある。」

この詩は『綴り方倶楽部』昭和九年四月号に掲載されたものである。入江通夫の引用した詩とは若干の違いがあり、同号では次のようになっている。

さかなの光　　梅田孝吉（尋五）
宮崎県宮崎郡瓜生野小学校

川の上を
かはせみがすれ〳〵に飛んだ。
くはへてゐる
さかなのうろこが、
夕日に、
きら〳〵とかがやいた。

〈阿萬祥吉先生指導〉

百田宗治評

これも日本画を見るやうに、きれいに書けてゐますね。たいへんこまかくつて、ハツキリしてゐてよろしい。

〈かがやいた〉といふ言葉が、少し固すぎるやうですね。〈きら〳〵と光つた〉でいゝでせう。

阿萬祥吉の前任校「瓜生野小学校」での指導作品である。入江道夫は、この詩は感覚的事実をのみを捉えたものであり、根底に社会性がないと批判しているのである。

それに対して、百田宗治は「日本画を見るやうに、きれいに書けてゐ」る点を評価している。評価の仕方は違うが、写生だと受け取っている点では入江道夫も百田宗治も同じである。

しかしこの詩は、「生と死」のテーマがその底にあると受け取るべきだろう。食うもの、食われるもの、生命のやりとりの一瞬である。その一瞬が、夕日に輝く魚の鱗に象徴されているのである。少なくとも指導者である阿萬祥吉にすれば、「日本画のようにきれいに書」いたわけではなく、そこには食われるもの、滅びるものの哀感が込められているはずだったのである。それを「日本画のようにきれいに書けている」としか受けとられず、入江通夫からの批判を受けたことは、指導者として心外だったに違いない。

しかしそのようにしか受け取られなかったことは事実で、それが「感官を通して写す」写生観、「この感官は、生活的行動、生活的実践に依ってこそ、初めて対象の具体的なすがたを把握することが出来るのである」とする考え方へと、阿萬祥吉を導いていったのだと思われる。

入江通夫は「さかなの光」を批判した後、「従来『無風流』だとして来た事の中に、新らしい詩の生きる素材を発見しなければならない。自分を観る場合に社会とのつながりに於いて観、自分を描くことの中に社会を描くといふ批判的態度に生きなければならない。自然を描写することによって社会を描写する態度に徹しなければならない。」と述べている。そして、その例の一つとして、「父」という題材を挙げている。

「例へば、『父』といふ題材は童詩には極めて少なかった。（略）それは、父といふものは多くの児童の家庭に於て、生産・労働の生活を営んで疲れた父であるために、従来の童詩では関心の焦点が合はないのである。そして意識的に排除せられて来た。然し次の如き作品が新童詩の展望の前に実践的にあらはれて来つつあることは、大いに注目すべきである。」

お父さん　　宮崎　中野辰夫

僕のお父さん
このさむいのに
えきで、にもつをかかへてゐる。
僕はたんぶのわきに立つて
お父さんが、にもつをかかへて
あつちに行くのを見てゐる

＊筆者注　例としてもう一篇他県の作品が挙げてあるが、略す。

「是等の観点は、従来の童詩には概して欠如してゐた。そして、『お父さんが笑つた』ことだの、「お父さんが暗で煙草のんでる」こ

とだのを捉へるに過ぎなかつた。労働とのつながりなしに見、考へ知り得る父が、現実に存在するものでない。我々は今後に於て、此の新しい観点を積極的に取上げることによつて、児童の詩をもつと解放してやらなければならない」

ここに挙げられた「お父さん」という詩は、木村寿の土々呂小学校での指導作品である。阿萬祥吉の指導作品が「単なる感覚的事実を捉へ」た作品として批判されているのに対し、これは労働との繋がりをもって父を見るという、新しい視点を持った詩として評価されている。木村寿は阿萬祥吉の「父」を評して「一日の仕事を体全体に漂はして帰つて来た父、仕事と父との交差を観取する様にしたら、こんな詩が、真実をもつて迫る生活詩を提供してくることになると思つてゐます。」（「推薦児童作品の鑑賞と指導」評）と述べているが、まさにこの点を指してのことである。

こうした批判を受けた後に、阿萬祥吉の「写生を根本に置く詩」「実相に観入して自然自己一元の生を写す」児童詩観を表現上に具現化した作品が生まれてくるのである。それが「父」であり、『年刊　日本児童詩集』に掲載された三篇の詩「枯草」「魚とり」「鉄砲うち」なのである。

なお、雑誌「工程」第一巻第九号（昭和十年十二月一日）の「全国文詩集採点」には、この阿萬祥吉の文集『あはき』が採り上げられ、百田宗治が「あはき　十一月　宮崎・第七校　尋六　阿萬祥吉　いゝ姿勢だ。この姿勢を生かすこと。」と述べている。

しかし「工程」第二巻第六号（昭和十一年六月一日発行）の「文集展望」では、「あはき　2　宮崎市第七宮崎校　阿萬祥吉　生活詩にやゝ類型的な見方に災されてゐるものがある。」と評されている。

付記　本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第三部にあたるものである。

（二〇〇四年四月三〇日受理）